

— Mちゃんのお母様からのお手紙 —

当時元気な高校生だった子どもは、3回目のコロナワクチンを接種する際、「大切な家族や友達を守りたい」という思いから、接種を受けました。

新しいワクチンというのが少し心配だったので、かかりつけ医師に相談したら「問題ないです」と言われ、世間でも「思いやりワクチン」という接種推奨キャンペーンが行われていて、私と子供は、リスクが十分に説明されていない状況に気づかず、医師と国を信じて接種しました。

しかし、接種したその日の夜から倦怠感や頭痛などの異変が現れ、次第に手が動かしにくくなり、全身の痛みと倦怠感で、起き上がることさえ困難な状態になっていきました。

慌てて病院に連れて行きましたが、当時の状況では、コロナワクチン接種による重い症状に対応する診療体系や厚労省からの詳しい情報もなく、医師は患者をどう扱うべきか分からなかっただけでなく…多くの医師たちには「ワクチン後遺症」という認識すらありませんでした。

行く先々の病院で「ワクチンをうって病気になるわけがない」という否定的な態度を取られたり、心無い言葉をかけられることもありました。

さらに紹介状には「心の問題」と書かれていて、これでは紹介された医師は最初から心因性しか考慮しない状況になってしまってもおかしくありません。

実際に、手足に力が入らない状態なのに、医師たちには嘘をついていると思われ、握力検査では「本気でやっていない」と何度も怒られました。

起き上がれないほどの倦怠感があるのに、有名な大学病院の医師でも、ろくに検査結果も見ずに「心の問題でしょう、心療内科を受診しますか？」と突き放されました。

でも私は、親として自分の子供を生めた時からずっと見守ってきて、こんなに突然起きた重い症状の数々に対して、コロナワクチン以外の原因が思い当たりませんでした。

そこで、医学の知識はありませんでしたが、大学病院での検査数値の意味を自分で一つ一つ調べ、ある数値が異常なことを見つけ、医師に「心の問題だけで、起き上がれないほど酷い症状がでますか？本当に何もおかしな点はないですか？」と、検査結果の紙をもう一度見てもらえるよう必死にお願いしました。

しぶしぶ医師は検査結果の紙を見直して、「ああ、こここの数値が低すぎますね。専門の部署で詳細検査しましょう」となり、結果、子供の症状はとある病気と診断されました。

そしてやっと治療が始まり、少しずつ起き上がるようになりました。

しかし診断されて治療が始まるまでかなり時間がかかった結果として、長期間学校を休んでしまいました。

高校側からは「このままでは留年しますよ」と言われ、先生に相談すると、「コロナワクチンのせいである可能性を否定出来ない、という医師の診断書があれば、長期欠席を公欠扱いします」と言うので、病院で医師に診断書をお願いしました。

しかし、それまでにかかったどの病院も診断書を書いてくれませんでした。

病院は当時の様々なリスクを懸念して、判断を避けるという動きがあったように感じます。

学校は「診断書がないなら公欠扱いには出来ません」「そもそもワクチン後遺症なんて聞いたことがない」と言ってきました。

さらに、「留年したくないなら無理してでも登校させてください。できないなら別の学校を探したらいい」と、相談するたびに何度も言われました。「別の学校を」と言われると、それ以上何も言えなくなってしまいます。

病院は、「診断書は書かないけど、留年や卒業は高校の問題だから高校や教育委員会に相談すればいい」と言い、高校は「病院での診断書が絶対必要です」と言い、

教育委員会に相談すると、「診断書は絶対必要ではないが、運用は学校に任せてある」と言い、互いに責任を押し付けあって何も進みませんでした。

私にはこれ以上どうしようも出来なかつたので、公欠扱いには出来ないのなら、せめてリモート授業をしてもらえないか?と考えました。

調べると、病気の子供への合理的配慮としてリモート授業の実例があったので、リモート授業が出来ないか高校へ相談しました。

しかし、設備が整っているのにも関わらず、先生たちの判断で「リモート授業は大変だから難しい」と言われ、一度も実施されませんでした。

教育委員会に相談すると、「リモート授業は出来るはずです」「やり方がわかりにくければ高校側へ説明も出来ます」と言ってくれたのに、高校側は、

「教育委員会にはもう相談しないでほしい」

と完全に拒否してきました。

私は、高校の先生にそう言われて、これ以上無理に頼むと、先生方の不満の矛先が子供に行くのでは?と怖くなり、引き下がるしかありませんでした。

余談ですが、高校側は、教育委員会に対して、「この親は高校教育の根幹を揺るがすようなことを言ってきた要注意な親」と報告をしていたようで、私はその後、教育委員会の一部の人からモンスターペアレント扱いのような冷たい対応をされ、とても驚き、報告内容を聞いてショックを受けました…

医療・教育・行政の連携の仕組みが制度化されていないため、誰も責任を持たないという構造が生じてしまっていて、

そして、全ての皺寄せが私の子供にのしかかりました。

結局、子供が副作用の強い薬を飲み、起き上がるのも辛い体のまま、無理をして登校することになりました。

登校してもすぐに症状が悪化して早退するので、仕事を休み登下校の付き添いをする私の心身もボロボロになりました。

途中で、診断書を書いてださる医師を紹介してもらったおかげもあり、留年はしなくてすみました。

3年生では校長先生が新しく変わって、子供への対応も変わったこともあり、症状悪化や長期欠席、薬の増量を繰り返しましたが、なんとか卒業も出来ました。

しかし本来なら、あんなに無理をせず、家で安静にしながらリモート授業を受けて、治療に専念出来ていれば、より早く早期治療が出来ていたかもしれないのにと、今でも悔しい気持ちになります。

卒業は出来ましたが、残念なことに、子供の症状は後遺症として残ってしまいました。

私は親としてこれからも、できる限り子供を支え続けたいと思っています。

でも自分1人では難しいことが身に染みているので、国や自治体や病院、そして、社会の皆さんの協力が必要だとも思っています。

最後に、

私の子供だけでなく、コロナワクチン後遺症とそれによる弊害で苦しむ方々が、子供も大人も、まだまだたくさんいます。

どうか、「気のせい」や「心の問題」で目の前の患者をあしらうのではなく、正しい調査と研究を進めたり、診療ガイドラインや治療法を明らかにしたり、そして、他の病気と同じように、コロナワクチンで健康被害にあった人たちが、適切な支援が受けられる社会になってほしいと、心から願っています。

皆が暮らしやすい、より良い社会になってほしい…このお手紙がその一助になればいいなと思います。

聞いていただいて、ありがとうございました。